



Title	月刊DRF 第58号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Issue Date	2014-10-31
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/73612">http://hdl.handle.net/2115/73612</a>
Type	periodical
Note	事務局: 北海道大学附属図書館; <a href="http://drf.lib.hokudai.ac.jp/">http://drf.lib.hokudai.ac.jp/</a> で公開したもの
File Information	DRFmonthly_58.pdf



[Instructions for use](#)



# 月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

## 第58号

No.58 Nov. 2014

- 【特集】 速報！ オープンアクセスウィーク2014
  - ・「今年は何した？」OAWみんなの活動
  - ・オープンアクセス・サミット2014 参加レポート
- 【レポート】 近畿病院図書館協議会第134回研修会
- 【連載】 今そこにあるオープンアクセス
  - 第9回「さらばベルリン Goodbye to Berlin」

# 速報！ オープンアクセスウィーク2014



静岡大学

今年もしずこぴーと



東北学院大学

たくさんのグッズと一緒にぱちり



北海道大学

全学イベントに合わせて展示



奈良女子大学

OAW色に飾り付け



デジタルサイネージでPR！

大阪府立大学



広島大学

リポジトリをリニューアル  
新機能も追加されました！

10月20～26日は国際オープンアクセスウィークでした。今年各機関の取組みをご紹介します！



法政大学

ポップとえこぴよん

- Flickr アルバムにみんなの写真を掲載中！  
[https://www.flickr.com/photos/drif\\_museum/sets/72157648355597067/](https://www.flickr.com/photos/drif_museum/sets/72157648355597067/)
- DRF-Wiki にてみんなの力作素材を配布中！  
<http://drif.lib.hokudai.ac.jp/drif/index.php?oaw2014>



期間中は、各機関でオープンアクセスに  
ちなんだイベントが開催されました！

「今年は何した？」

O  
A  
W

みんなの活動

## 千葉大学：平成26年度第3回千葉大学アカデミック・リンク・セミナー

### 「オープン化する研究情報流通と学習との接点」

10月21日、平成26年度第3回アカデミック・リンク・セミナーを開催しました。今回は「オープン化する研究情報流通と学習との接点」をテーマに土屋俊氏（大学評価・学位授与機構教授）と尾城孝一氏（国立情報学研究所学術基盤推進部次長）にご講演いただきました。

土屋氏からは「学術情報のオープン化が導く大学の将来」と題してこの10年間の学術情報流通のオープン化の動向やMOOCの登場による「大学の社会的役割」の変化について語られました。講演は「今や学士学位はある一定の能力を保証するようなものではなくっており、MOOCのような形であればもっとはつきりと学習経歴を確



左から  
土屋氏（大学評価・学位授与機構）  
尾城氏（国立情報学研究所）

認できるようになる。学習の主体が学生であり自らが学習する内容を選ぶようになるならば大学はいらない」という結論で締めくくられ、会場からはどよめきが起きました。尾城氏からは「千葉大学CURATORの10年 オープンアクセスの10年」と題して日本初の機関リポジトリである千葉大学CURATORの誕生秘話と過去10年の動きが語られました。今後10年の展望として、機関リポジトリを教員にとってもっと身近な存在にし、教員のワークフローとして組み込んでいくことが重要だというお話が印象に残りました。当日の配付資料、録画映像はアカデミック・リンク・センターのWebページ (<http://alc.chiba-u.jp/>) で公開予定ですのでそちらもぜひご覧ください。

日時：平成26年10月21日（火）14:30-16:30  
場所：千葉大学アカデミック・リンク・センター  
| 棟1階コンテンツスタジオ

寄稿：伊勢 幸恵（千葉大学）

## 神戸大学：未来の図書館：図書館の新しいミッション 第I弾

### 「オープンアクセスウィーク・ワークショップ」

10月22日、神戸大学附属図書館主催で標記ワークショップを開催しました。

はじめに本学職員から開催趣旨の説明とOAの現状整理があり、続いて講演、パネルディスカッションへと移りました。佐藤義則先生（東北学院大学教授）の講演では、研究データ管理・公開に関する動向と、支援を始めた図書館の事例が英米を中心に紹介され、三根慎二先生（三重大学専任講師）の講演ではOAジャーナルとAPCの現状と課題が、具体的なデータをもとに解説されました。佐藤翔先生（同志社大学助教）の講演では神戸大学リポジトリ“Kernel”のアクセスログをもとに、現状とリポジトリのミッションに関わる分析をしていただきました。

パネルディスカッションでは、研究データとリポジトリの課題、研究者とOA、データを扱う人材の課題等が、質疑を交えながら議論されました。特に研究データ管理に対応できる人材育成が課題である点は登壇者全員が一致し、図書館情報学教育と図書館組織の制度双方の変革が必要だと指摘されました。

学内外から51名の参加があり、また近隣大学のURAにも参加していただき、盛会のうちに終えることができました。ご関心ある方は講演資料もぜひご覧ください。

詳細・講演資料：<http://lib.kobe-u.ac.jp/www/html/events/oaworkshop.html>

Twitterまとめ：<http://togetter.com/li/735416>

文：小村 愛美（神戸大学、DRF企画WG）



日時：平成26年10月22日（水）13:20-17:00  
場所：神戸大学附属図書館フロンティア館  
プレゼンテーションホール



# 第1部：第3回SPARC Japanセミナー2014 「オープン世代」のScience

「「オープン世代」のScience」と題して、第3回SPARC Japanセミナー2014が、オープンアクセスウィーク期間中の10月21日(火)に学術総合センターで開催されました。今年のオープンアクセスウィークのテーマ「Generation Open(オープン世代)」に合わせて、若い世代を中心とした研究をとりまくオープン化のムーブメントを強く感じる内容のセミナーでした。



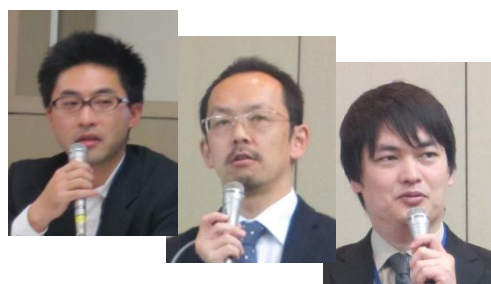
前半は、5人の講師それぞれから事例報告がありました。

早稲田大学理工学術院の岩崎秀雄氏からは、生命科学の研究者とアーティストがいっしょに活動する場を提供している、生命美学プラットフォームの紹介があり、サイエンスとアートの関係性とその課題について考えさせられる内容でした。

明治大学米沢嘉博記念図書館の山田俊幸氏からは、ニコニコ学会βなどでの活動の経験から、ソーシャルメディアの発達によって、研究は研究者以外の誰でもが見たり発表したりすることが楽しめるようになってきている状況の紹介がありました。



左から  
岩崎氏 (早稲田大学)  
山田氏 (明治大学)



左から  
竹澤氏 (ゼネラルヘルスケア株式会社)  
駒井氏 (奈良先端科学技術大学院大学)  
堀川氏 (慶應義塾大学SFC研究所)

ゼネラルヘルスケア株式会社の竹澤慎一郎氏からは、日本発の商用総合学術雑誌としてのオープンアクセスジャーナルの立ち上げから今後の発展計画などの説明がありましたが、査読協力金システム計画は、特に会場の関心が高かったようです。

奈良先端科学技術大学院大学の駒井章治氏は、日本学術会議の若手アカデミー委員会の立場から、研究をとりまく制度上の変化の問題を指摘し、研究不正の防止や研究支援のための未来志向なネットワークづくりの必要性を強調していました。

慶應義塾大学SFC研究所の堀川大樹氏の報告からは、フリーな研究者にとってオープンアクセスは研究活動に必要な人的・資金リソースの獲得の役割を果たしていて、その結果がさらなるオープンアクセス化を促進していることが分かりました。



後半のパネルディスカッションではモデレーターである佐藤翔氏 (同志社大学) の進行で、司会の榎木英介氏 (近畿大学医学部) も交えた討議が行われました。「好きな研究で外部資金をとる工夫は？」や「自分もバイオハッカーにどうすればなれる？」など、その立場でないと語れない内容を多く聞くことができました。

最後のまとめでは、これまでのSPARC Japanセミナーで扱われてきたテーマについて、従来は最終的に研究の世界の問題とされてきたオープンアクセスの課題が、今回研究者どうしてディスカッションできたことがよかったという感想や、現状の問題を打破するさらなるオープン化の潮流が学術の世界でも起きているのではないかと期待が寄せられました。

文：杉山 智章 (静岡大学、DRF企画WG)

## 第2部：未来への飛翔

### ～機関リポジトリの更なる発展を目指して～

機関リポジトリはこれまでも日本におけるオープンアクセスの一端を担い続けてきましたが、ここ数年で導入機関が急速に増えていることは特筆に値します。平成25年度から施行された学位規則の改定によって、各大学が学位論文の電子化を迫られたことが大きな要因ですが、ともあれ、日本国内の機関リポジトリはインキュベーション期の段階を過ぎたと言ってよいでしょう。

本サミットでは、まず基調講演として、引原隆士京都大学附属図書館長が大学におけるオープンアクセス戦略について、研究者としての立場からの視点を主として講演されました。

#### 【セッション1: 機関リポジトリによるオープンアクセスの新展開】

セッション1では、機関リポジトリの持つコンテンツの価値を向上させるツールとしてJaLC DOIの持つ可能性が示され、またこれを用いた実験事例が報告されました。

DOIはWeb上のコンテンツに恒久的に付与される識別子。全世界共通の住所を機関リポジトリ掲載のコンテンツに割り振ることで、利用者を目的のコンテンツへスムーズに導くことができます。



#### 【セッション2: JAIRO Cloudの新展開】

これまでリポジトリを持たなかった大学がこれを構築・公開することができた背景として語らずに済ませることのできないJAIRO Cloudの今後のシステム面での展開が示された後、既構築機関のJAIRO Cloudへの移行実験の経過報告が行われました。

移行実験の報告では実際に実験に携わった担当者が登壇し、マニュアルも十分に整備されていない中で抽出ツールの扱いやフィルターの作成に苦心した経験などが話題に上りました。JAIRO Cloudへの移行を検討中という機関からの参加者も多く来場していたのは、このセッションへの注目度が高いことの表れと言えるのではないのでしょうか。



#### 【セッション3: コミュニティが支えるJAIRO Cloud】

セッション3ではJAIRO Cloud参加館からのホットなコメント、そしてJAIRO Cloudの有料化の提案についての詳しい説明がありました。最後に行われたディスカッションでは、JAIRO Cloudの有料化について会場から様々な質問や指摘がNII担当者へ投げかけられました。

NII側から示された今後のJAIRO Cloudの運用モデルは、NIIが主導する現在から段階を踏んで参加館の互恵的コミュニティ中心の運用に変化し、その上で各参加館から料金を徴収するというもの。その利用料金は自前でサーバーを整え、一からリポジトリを構築していく工程を思うと決して高額ではなく、むしろお得と言うべき数字です。ただしこれを継続して支えていく主体は、NIIを含む参加館のコミュニティそのもの。課金体制も含んだコミュニティが今後数年で醸成されるのかということについて、はっきりとしたビジョンを持っている人はまだ少ないように見受けられました。

NIIと大学図書館の担当者、それぞれが直接に意見を申し述べたりレスポンスをしたりすることができるのは、実際の会場ならではの。リポジトリ構築機関同士の互恵的な関係は、メールや掲示板での綿密なやりとりを何十回と繰り返してようやくできる部分と、実際に一度顔を突き合わせて話し合うことによって築かれる部分もあるのだろうと新たに気付かされたオープンアクセスウィークの一日でした。

寄稿：中原 由美子（千葉大学）

# 近畿病院図書室協議会第134回研修会

9月27日（土）近畿病院図書室協議会（以下、病図協）主催、DRF後援による第134回研修会を開催しました。テーマ「病院図書館の機能向上—図書館システムとリポジトリ」のもと、病院図書室で機関リポジトリを運用していく為の実務的な講習を受けました。

病図協では、2012年にMIS29（第29回医学情報サービス研究大会）のDRF主催パネルディスカッションで病院刊行物の機関リポジトリの需要や必要性を認識し、2014年2月の第132回研修会で開設・運用の基礎知識を学びました。（月刊DRF第50号にレポート掲載）。4月からは機関リポジトリプロジェクトチームを立ち上げ、共同リポジトリ開設に向けて準備を進めております。

今回の研修会では、メタデータの入力、スキャンと透明テキスト付きPDFの作成、リポジトリにまつわる著作権などより実践的なことを学び、具体的なリポジトリ構築に向けてさらに前進することが出来ました。

<寄稿：谷口裕美子（近畿病院図書室協議会研修部/八尾市立病院図書室）>

## 1.リポジトリの登録作業（メタデータの記述） 株式会社アグレックス 河原 香代子氏

河原氏からは、DSpaceを使ってのメタデータの入力について教えていただきました。病図協のデモサイトをアグレックス様に作っていただいたの演習だったので、DSpaceの「コミュニティ」「サブコミュニティ」「コレクション」の構成やデータの項目など、実際にどのような画面でどのように入力していくのかを具体的に学ぶことができ、今後の実践に大変役立つと思えました。

## 2.資料の電子化（スキャン、OCR） 関西福祉大学 西本 朱美氏

西本氏からは、実際にスキャナとOCRソフトを使って透明テキスト付きPDFを作成していただき、効率のよい手順と最適な解像度、OCRの変換前後のファイルの管理方法などを学ぶことが出来ました。



## 3.リポジトリにまつわる著作権 大阪大学附属図書館 前田 信治氏

前田氏からは、リポジトリの実務を行うにあたって理解しておかなければならない著作権について学びました。著者から許諾を得るべきなのは「複製権」「公衆送信権」であることや、出版物の著作権について、学会・出版社の著作権ポリシーの調査方法を講義いただきました。

また、病院紀要の投稿規程を検証しながらどのように規程を作り、著者から許諾を得ていけば良いかという実践的なことまで教わりました。

132回研修会の事前MLも引き続き活用し、リポジトリに関するあらゆる疑問・質問に前田氏よりお答えいただき、私達の学びは続いております。

実際に共同リポジトリを立ち上げるまで、まだまだ課題はありますが、引き続き学び、考え、共同リポジトリ開設に向けて取り組みます。



## 第9回 さらばベルリン Goodbye to Berlin

オープンアクセス(OA)のステークホルダー(利害関係者)と言えば、まず研究者、そして学会・学術出版社員、図書館員、研究助成団体関係者、さらには納税者たる一般市民などが思い浮かぶが、実はもっと直接的な利害関係を持つ人々がいる。それは出版社に出資(あるいは出資を検討)している投資家、そして証券アナリストである。出版社の株価が自分たちの利益・損失に直結するので、ある意味、大多数の研究者や図書館員よりはるかに真剣にOAの動向に注目していると言ってもいいかもしれない。

9月下旬、[バーンスタイン・リサーチ](#)という調査会社のクラウドイオ・アスペシ(Claudio Aspesi)というアナリストがエルゼビア社に関する投資レポートを発表し、これをおなじみの[リチャード・ポインダー](#)が公開している([STI Updates](#)では[タイムズ・ハイパー・エデュケーション\(THE\)の記事](#)として紹介しているが、THE記事もソースはポインダー)。そのタイトルが「[リード・エルゼビア:さらばベルリン—薄れゆくオープンアクセスの脅威](#)」である。

アスペシは2011年、エルゼビア社のジャーナル・ビジネスは大学図書館予算の削減を受けて成長が鈍るとして、同社の格付けを下げた。さらに2012年、欧米でOA化に向けた政策が打ち出され、全面的なゴールドOAへの移行が現実味を帯びてくると、これがやはり同社の収益に悪影響を及ぼすと予測した。この時期、エルゼビア社はボイコット運動にあって[研究著作法案\(RWA\)](#)等への支持表明を撤回する(いわゆる学界の春)など、会社としてのイメージもあまり良くなかった。2012年3月、アスペシはポインダーの[インタビュー](#)を受け、エルゼビア社がRWAを支持したのは間違いだったという趣旨の発言をしている。

しかしながら、今回のレポートは、タイトルが示すように、既存の大手出版社にOAが脅威となる事態は遠のいたというものである。ベルリンとは2003年に発せられた「[ベルリン宣言](#)」のことで、

前年の[BOAI](#)などと共にOA運動の高まりを象徴する文書である。それから11年が経過した現在、相変わらず予約購読モデルは健在であるとして、エルゼビア社の格付けを元に戻している。いわばベルリン宣言への訣別の辞である。

その理由の一つとして挙げられているのが、北米の大学図書館予算の改善である。2012-13年度では6割以上の大学で増額となっている。懸念されたビッグディールの大量キャンセルは起こらなかった。図書館員は予算さえあればビッグディールを更新し続ける、というのがアスペシの出した結論である。

欧米のOA政策については、ハイブリッドモデルやエンバゴの設定が許容されているので、図書館が雑誌キャンセルに向かう可能性は低く、打撃にはならない。それどころか、論文加工料(APC)補助によってさらなる利益を得る可能性さえある。そもそもOAの目標(どういう問題を解決するのか)というのが人によって異なり、これでは何も達成できないだろう、といった指摘もあってOA推進論者には耳が痛い。

もちろんエルゼビア社も完全に安泰というわけではない。アスペシが指摘するリスクは二つある。図書館全体の予算に対して資料購入費の伸びが大きく、再び予算削減となる恐れがあることと、ハイブリッドモデルでのAPCと購読料の二重取り批判が高まる可能性があることである。

投資という観点からの冷徹な分析で非常に興味深かったのだが、英米のメーリングリストではほとんど反響がなかった([フランスではあった](#))。これも気になるところである。

## 栗山正光

首都大学東京学術情報基盤センター教授  
デジタルリポジトリ連合アドバイザー

【researchmap】

<http://researchmap.jp/read0195462>



次号予告:

特集: 2014年10大ニュース

報告: ORCID Outreach Meeting in Tokyo



Facebookやっています。

<http://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation>

月刊DRF読者アンケート受付中!

[http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf\\_inq.html](http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html)

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。gekkandrf@gmail.com

月刊DRF第58号 平成26年10月31日発行 デジタルリポジトリ連合 <http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf/>